

# 地域アートプロジェクトへの参画を通じた 学生の変容的学び

## —「アートフェスタふじみ野」の事例を手がかりに—

渡辺 行野\*・西田 希\*\*・木村 浩則\*

本学は、ふじみ野市と包括連携協定を締結し様々な事業を行ってきた。本研究では、その一つである「アートフェスタふじみ野」における地域アートプロジェクトに着目し、学生の地域社会への貢献や活動への参画を通してどのような学びが得られるのか、その教育的意義を理論的かつ実証的に検討することとした。

学びの概念は、「これまで慣れ親しんできた枠組みの変化あるいは転換をもたらすような学び」、「古い経験を新たな一連の準拠枠から解釈し直し、そうすることで、古い経験に対し新たな意味と見方を付与する」とされるジャック・メジロー (Jack Mezirow) の「変容的学び (transformative learning)」を援用した。

調査対象は、アートフェスタふじみ野において対面とオンライン配信でパフォーマンス (表現を考える・作り上げる・演じる) を行った学生とした。調査回答からは共通して「繋がり」、「達成感」、「自信」等の肯定的な回答が得られた。また活動を通して「専門職としての資質・能力の向上」や「自己肯定感や自信の形成」に繋がったことも共通点として明らかとなった。分析の結果から、学生の変容的な学びの一端を垣間見ることができ、本活動が教育的に意義あるものとして機能している可能性を明らかにすることができた。

今後の課題として、学生の変容的学びのプロセスを引き続き調査し、データを蓄積・分析していくことで、より重層的に学生の変容的な学びに繋がるプロセスを構築していく必要がある。

**Key words** : 変容的学び, アート, 地域連携, 保育者養成

### はじめに

文京学院大学は、2008年にふじみ野市と包括連携協定を締結して以降、自治体主催の諸事業に積極的に協力するとともに、様々な連携事業に取り組んできた。その一つが、本稿で取り上げる「アートフェスタふじみ野」(以下、アートフェスタ)である。2016年にスタートした本プロジェクトは今年度で6度目の開催となる。第1回は行政の単独事業として実施されたが、翌年の第2回

以降は、実行委員会形式で行われ、本学もその実行委員会の一翼を担ってきた。その都度、教職員・学生が様々な仕方でも参画し、本プロジェクトの継続、発展に貢献してきた。

大学が地域連携を進めるうえでの不可欠の土台は、言うまでもなく連携先との対等なパートナーシップを築くことである。例えば、連携先が大学を一方的なサービスの提供者としてとらえ、学生派遣がたんに人手不足解消の為の人材として扱われるならば、真の連携とは言えず、そのような関

\*人間学部児童発達学科

\*\*目白大学

係性は長続きしないだろう。その連携事業が教員の研究や学生の学び（変容的学び）にとってどのような意義があるのかが常に問われなければならないのである。

なお、ここでは、「学び」という言葉に代わって、「変容的学び」という概念を使用する。これは、ジャック・メジロー（Jack Mezirow）の「形成的学び（formative learning）」と「変容的学び（transformative learning）」の区別に依拠している。メジローによれば、形成的学びとは、これまでの学習を通じて獲得してきたものの見方、理解の仕方の枠組みの範囲内での学び、あるいはそれらを強化するような学びである。これは、社会化や一般的な学校教育においてみられる学習の在り方である。それに対して、変容的学びとは、これまで慣れ親しんできたその枠組みの変化あるいは転換をもたらすような学びのことである。私たちは、何かを学習するとき、過去に習慣化した意味づけを新たな経験にあてがう。言い換えれば、すでに確立している自分なりの準拠枠を用いて、その経験を理解し把握する。それに対して変容的学びでは、古い経験を新たな一連の準拠枠から解釈し直し、そうすることで、古い経験に対し新たな意味と見方を付与する。

では、このような変容的学びをもたらす経験とは何だろうか。おそらくそれは知識の習得を中心とする学習スタイルから生まれるものではない。またたんに活動や経験に没頭すればよいというものでもない。それには、習慣化され自明化されてきた自己の準拠枠を揺さぶり、根本的な省察を迫るような出会いと経験が必要である。そのような出会いと経験の場を提供しうるのが、アートプロジェクトではないか。

本稿は、こうした視点から地域におけるアートプロジェクトの教育的意義を理論的かつ実証的に検討しようとするものである。このアートプロジェクトが学生の変容的学びにとってどのような積極的な意味を持っているのか、またどのような課題をはらんでいるか。それらを検討することで、このプロジェクトの継続的な発展を支えていきたい。

第一章では、連携事業として最初に実施された

アートフェスタ 2017 ならびにそれ以降の取り組みについて紹介するとともに、それらのプロジェクトの教育的意義について検討する。第二章では、アートフェスタ 2018～2020 に参画した本学学生・卒業生の学びの成果を検証する。第三章では、アートフェスタ 2020 に参画した A 大学の学生の学びの成果を検証する。そして、最後に全体的な考察を通じて、改めてアートフェスタの教育的意義とその課題を提示したい。

## 第 1 章 アートプロジェクトへの参画と大学教育

まず本学にとって最初のプロジェクトへの参加であった「アートフェスタふじみ野 2017」（以下、フェスタ 2017）を振り返りながら、その際に考えた取り組みの教育的意義をまとめておきたい。

### 1. アートフェスタ 2017 の取り組み

フェスタ 2017 の開催にあたっては、当初からたんなるアートイベントではなく、アートの力によって地域社会の課題を解決し、地域の人々をエンパワーする為の取り組みとして位置づけた。市の文化振興基本計画の施策方針に依拠し、「高齢者や障がい者、子育て世代、外国籍市民など、普段交流が少ない市民が、文化芸術を通じて出会い、交流する場や機会」となることをめざした。そこで、前年に制定された「手話言語条例」の趣旨を広く市民に理解してもらうことを大きなテーマとし、また実行委員会を組織することで、多くの市民の力を結集できるようにした。まずふじみ野市、ショッピングセンターソコカふじみ野、文京学院大学の三者が主体となって、市内の諸団体に協力の呼びかけを行った。その結果、ふじみ野市社会福祉協議会、ふじみ野国際交流センター、高齢者安心相談センターおおい、県立ふじみ野高校生徒会が実行委員会に加わり、およそ 10 か月の期間を費やして準備を進めていった。

準備にあたって大学が考えるべきは、学生をこのプロジェクトに参画させることが、どうすれば教育的価値を持つものになるかということであっ

た。そこで、学生がその日一日お手伝いとして動員されるだけのいわゆる「イベント主義」にならないよう、学生実行委員会を組織し、当日までのプロセスにも参画できるものにしようと考えた。このことは、ふじみ野高校生徒会顧問の賛同するところとなり、組織はさらに学生高校生実行委員会へと発展した。

学生高校生実行委員が中心的に取り組んだのは、手話歌、手話ダンスの普及であった。歌とダンスは、大学教員と学生（手話歌サークル）、卒業生（ダンサー）が中心となって創作した。そして、それを学生、高校生が練習し、地域の高齢者や小学校児童に教えるという活動を展開した。また学生が中心となり、チラシの作成や配布、動画の配信なども行った。もちろん学生たちは、イベント当日もボランティアスタッフとして、あるいは舞台の演者として参加した。最終的にフェスタ2017に参画した学生・教職員は100名を超え、その意味でも大学が地域社会に大きく貢献する取り組みとなった。

それでは、このプロジェクトはどのような教育的意義を持ちうるのか。それを、当時の報告書の中で、次の四点にまとめた。

①地域課題の解決、手話言語の普及・啓発活動に学生が取り組むことによって、地域の福祉文化の構築に寄与することで、学生の主体性を高め市民性を育てることができる。

②学生自身が手話文化に触れ、異質な他者と出会うことによって、社会の多様性を理解し、本学の掲げる共生の理念を育むことができる。

③地域の多様な人々との協働活動を通じて、社会性やコミュニケーション能力を身につけることができる。

④共通の目標をもって活動に取り組み、それを成功させることで達成感を得ることができる。それは、今後自らの人生を切り拓いていく為に必要な自己肯定感や自信の形成に繋がるはずである。

なお、取り組みの詳細と教育的成果の検証結果については、木村浩則・文野洋・奈良環(2017)「産学官連携によるサービスラーニング・プログラムの開発 報告書」を参照されたい。

## 2. それ以降のアートフェスタの取り組みとその教育的意義

これ以降も本学は、アートフェスタに継続的に関わってきた。アートフェスタ2018については第二章で取り上げることとし、ここではアートフェスタふじみ野2019(以下、アートフェスタ2019)ならびにアートフェスタふじみ野2020(以下、アートフェスタ2020)の事例について紹介する。この二回は、学生の参画を意識的に追及した取り組みではあったが、アートフェスタ2017とはプロジェクトの趣旨も学生参加の形態も大きく異なるものである。アートフェスタ2019は、市民が交流しながらアートを楽しむことをメインテーマとし、本学教員の指導の下、学生たちが一本のミュージカル作品を作り上げ、ホール上演するという取り組みである。そして、アートフェスタ2020は、コロナ禍におけるアートを通じた心の交流をテーマとし、本学出身のA大学教員の指導の下、A大学の学生たちがダンス作品をつくり、それを動画配信するという取り組みである。

また音楽、演劇、ダンスといったパフォーマンスなアート活動には、それ固有の教育的価値が存在するはずであり、アートフェスタ2017ではそのことをほとんど意識していなかった。それゆえ、前述したアートフェスタ2017の教育的意義をそのまま当てはまるわけにはいかない。

そこで以下、アートフェスタ2019、アートフェスタ2020それぞれの実践形態に則して、その教育的意義を検討してみたい。

アートフェスタ2019では、音楽を専門とする教員が、保育・教職課程の学生と共に子ども向けミュージカルを制作し、上演するという取り組みを行った。それゆえ、指導者も学生もその専門性とのつながりが明確である。また作品づくりの過程では、異質な他者との想像的で創造的な協働活動が不可欠であり、そのような活動プロセスにも教育的意義が見出されるだろう。さらに上演活動には、子どもを中心とする観客との相互作用という側面がある。それもまた学生たちに与えた影響は大きいと思われる。

アートフェスタ2020では、体育を専門とする教員とともに、保育・教職課程の学生たちがリ

モートで繋ぐダンス作品を創作し、それを動画配信するという取り組みを行った。それゆえ、その作品作りはやはり指導者、学生の専門性とのつながりをもっている。しかし、コロナ禍という障壁があって、学生同士が集まって集団で劇づくりに取り組んだアートフェスタ2019のような創作過程を経験させることはできていない。また動画配信であった為、生の舞台のように特定の観客との直接的な相互作用は生じえない。だが、SNSを通じて視聴者の反応を実感することができるし、その反応は、生の公演とは違って、空間的・時間的な制約なしに拡散が継続していく。この動画配信に固有のコミュニケーションの特徴も学生に対する何らかの影響に繋がるだろう。

では、これら二つのプロジェクトの特徴からどのような教育的意義が見出されるのだろうか。それを以下のような問いとして整理してみたい。

(1) アートプロジェクトに取り組んだことは、保育・教育の専門性（知識とスキル）を深め、高める上で、また専門職への動機づけや学習意欲の向上という点で、どのように役立ただろうか？

(2) それを実感したのは、どのような経験からだろうか？

(3) 仲間と共にアートプロジェクトを成功させたことで何らかの達成感を得ることができただろうか？また、自己の肯定感や自信の形成に繋がっただろうか？

(4) それを実感したのは、具体的にどのような経験からだろうか？

(5) 地域プロジェクトへの参加を通じて、地域社会に何らかの貢献ができたと感じられただろうか？

(6) それは具体的にはどのような貢献だろうか？

(7) その他にアートプロジェクトの経験から得るものがあつたとしたら、それは何だろうか？

以上の問いの検証から、われわれはアートプロジェクトの持つ教育的意義を浮き彫りにできるのではないかと考える。以下の章では、これらの問いをふまえて、それぞれのアートフェスタにおける取組を振り返り、学生の変容的学びのプロセスを明らかにしていく。

## 第2章 アートフェスタ2018－2020年度 の取組

### 1. 取組の内容

アートフェスタ2018からは、参加団体ごとに開催ブースを分担することになり、アートフェスタのメイン企画である産業文化センターの催しを本学が担当することとなった。アートフェスタ2017からアートフェスタのテーマソングとなる手話歌「まちのこえそらのおと」に携わっていた学生ら（以下、ドーナツレモン）を中心に、アートフェスタ2018では、手話歌や学生の得意とする楽器演奏等をホールで披露した。またアートフェスタ2019では、初回から関わっているドーナツレモンも社会人となったがフェスタに参加した。学生は教員の声掛けで集った有志団体が参加し、学生による創作舞台を上演した。1～4学年までの学生30名で構成された。

前述の通りアートフェスタ2019は、市民を巻き込み交流することでアートを共に楽しむことを目指すものであったこと、また開催時期がクリスマス直前であったこともあり、学生による創作舞台では「サンタがふじみ野にやってくる」という題名で、学生たちが自らストーリーを考えた。ストーリーを上演するにあたっては、登場人物の構成や演者、映像や舞台背景等の技術、劇中の音楽や感情表現を表す音素材・BGM、演技を行う上での演劇的な要素、劇中におけるダンス等の様々な役割をメンバーで分担し、一人一人の学生の特性や特技を活かしながら総合的なパフォーマンスとして学生たちが自ら全てを創作していくことを目的とした。教員は学生たちの活動を統括するとともに舞台監督として関わった。創作過程では、当日来客する幅広い年齢層は勿論、学生が学ぶ保育者・教育者における専門性を発揮することで、フロアの子も達を巻き込むアート活動となるようなホール上演を目指した。その際、台本以外のアドリブ、例えば子どもへの問いかけや受け答え、子ども達を惹きつける為の導入、子ども達を集めるシーンを設ける等、あらかじめ様々な場面を想定し、幾つもの対応を考え、それらを視野に入しながら舞台を創作・準備・練習を行っていった。

アートフェスタ 2020 では、コロナの影響によりアートフェスタが全てオンライン配信での開催となった。その為、アートフェスタ 2019 における学生による創作舞台の録画を再度オンデマンド配信した。

## 2. 調査方法

数年における地域と学生との関わりの経緯を踏まえ、第1章の最後に示された7つの問いを元に項目を作成し調査を行った。調査対象者は、アートフェスタ 2019 における①学生による創作舞台「サンタがふじみ野にやってくる」についての振り返りとして自由記述による質問紙調査、②初回アートフェスタから参加しテーマソング手話歌等に携わり、現在は保育・教育現場へ就職している卒業生「ドーナツレモン」からのインタビュー調査を行った。

質問紙調査は「Forms」によるオンライン回答とし、2021年8月16日～29日の期間に実施した。インタビュー調査は「Zoom」オンラインにて2021年8月26日に実施した。これらの調査を行うにあたり、本調査の目的・任意回答・回答による不利益が生じないこと（本人を特定しない）・本紀要論文への投稿や報告の場で用いることを説明し、本人の同意を得た上で実施した。

## 3. 結果と考察

### 3-1 質問紙調査

質問紙調査の内容は、第1章の最後に示された問いを元にして作成した。参加学生30名中、提出された19名を有効回答として扱った。質問項目は以下の通りである。

表1 質問紙項目

○2019年度、アートフェスタふじみ野に参加して良かったですか？ 上記の質問に対して、そのように感じた理由を具体的に述べてください。
(1) この活動は、「専門職としての資質・能力（保育・教育の専門性・スキル）を向上」させるものでしたか？ またこの活動は役に立ちましたか？
(2) 仲間と共にプロジェクトを成功させたことで、何か「達成感」を得ることができましたか？ 「自己肯定感や自信の形成」に繋がりましたか？

それを実感したのはどのような経験からでしょうか？

- (3) 地域プロジェクトへの参加を通じて、地域社会に何らかの貢献ができたと感じられましたか？  
それは具体的にどのような貢献ですか？
- (4) どんなことでも伝えたいことがあれば自由に書いてください。（総合的な所見）

フェスタ 2019 に参加した学生たちの現在の学年や職業の内訳としては、学部3年生以上が11名、子どもと関わる職業に就職した卒業生は6名（図1）となっている。

### 2019に参加した学生の現在の学年と職業

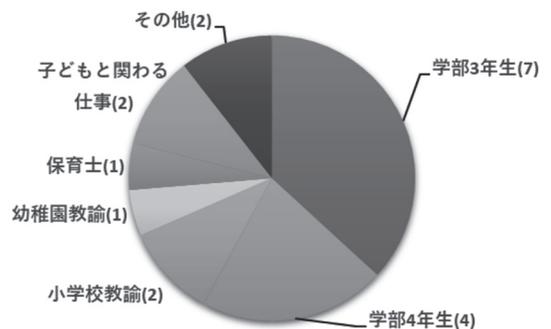


図1 アートフェスタふじみ野 2019 参加者の内訳

アートフェスタふじみ野 2019 に参加して良かったか。

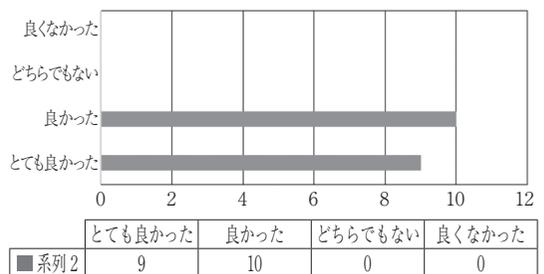


図2 参加して良かったかの回答

次に、質問項目毎に分析を行う。回答者全員が「とても良かった、良かった」と参加に対して肯定的に回答した（図2）。「参加して良かった理由」としては、「地域の人や子どもたちが笑顔になってくれた」「リハーサルを含め一人一人が色々と考えた結果、本番が成功できて嬉しかった」「会場等での地域の人々との関わりや先輩後輩の関わり、繋がりの大切さ」「準備は大変だったけれど

楽しかった」「コミュニケーション能力の向上や団結力を生み出した」「とても良い経験になった」等の記述があり、それぞれの役割に対する貢献度についても、任務を果たせたことや仲間と一緒に創り上げたことへの満足感等、肯定的な記述がみられた。

#### (1) 専門職としての資質・能力について

「フロアの子どもたちとの関わりを経験したことによる自信」「緊張感から得られた人前に立つことの力」「子ども目線で考えることの大切さ」「笑顔で楽しむことの大切さ」「表情やパフォーマンスを考えることのスキル向上」「積極性」「児童理解の向上」「現場でも同様の行事があることの経験」「エンターテイナーとしての資質向上」等、肯定的な記述が多くみられた。仲間と協力し合うことの大切さ等の経験は、保育・教育現場でも必要な要素であり、そうした経験を通じたことにより更に子ども理解が広がったり、現場での対応について考えるきっかけとなったりして、参加者の自信にも繋がったと推察される。また仲間と共に作り上げることから創造力や表現力が向上すること、構成する力やグループのマネジメント力等、まさに現場で必要となる力を多角的に捉える記述もみられ、保育者・教育者としての資質能力の伸長に繋がったと推察される。

#### (2) 活動を通して得たことや達成感・自己肯定感や自信への繋がりについて

「共に仲間と協働し作り上げた達成感や仲間との絆」「団結力」「仲間の大切さやコミュニケーション力の向上」「この経験が自信に繋がった」等の記述がみられた。さらに、活動を通して仲間と共にプロジェクトを成功できたことで達成感を得られたと回答した学生が非常に多い。練習や準備過程、当日の上演を通じて自ら肌で感じとったものが、一人ひとりの自己肯定感や自信に繋がっていったことが読み取れる。しかしその過程には、それぞれが常に当日の上演まで相反する気持ちや葛藤の中でもがいていた事実があったことも分かる。「練習は大変だったが終わってみたら楽しかった」「緊張したがその緊張が喜びや成功した時の

達成感になった」「途中挫折しそうになったが仲間と共に協働したことの意味が上演を通して感じられた」等、一人ひとりが日々様々な感情を経てきた過程があったからこそ生まれた達成感であると捉えられる。

#### (3) 地域社会への貢献について

「地域連携の大切さを学んだ」「普段関わることのない地域の人々との触れ合いや交流から笑顔が生まれた」「自分たちのパフォーマンスを楽しんでくれることの嬉しさ」「自分自身も楽しめたことの満足感」等の記述が見られた。また、「普段知らない人たちが関わって仲良くなっていく姿が印象的」「地域の人々のぬくもりやふじみ野市が好きといった感情が生まれた」「参加することで地域の活動も知ることができた」等の地域への愛着が感じられるような記述も見られた。大学内に留まることなく地域プロジェクトへの参加として地域社会と関わりを持ったことで、一人ひとりが地域貢献に携わった感覚を得られたことや、地域貢献への関心を持つようになったことが分かった。

#### (4) 総合的な所見について

「思い返してみれば改めて良い経験だった」「楽しかった」「このような素敵なイベントが続いてほしい」「感謝」「アートフェスタを通して出会えた仲間がかけがえのない存在」「先輩の存在が今になって分かる」等、肯定的な記述が多かった。また「その当時は分からなかったことが分かった」「当時は練習時間が苦痛であったが練習時間確保は必要」「目的に向かう温度差の改善」「次の機会があれば目標をたてたい」「機会があれば再度参加したい」等の次に生かす・次につなげていく気持ちや反省点・課題となる記述もみられた。これらの記述からは、継続的なモチベーションに派生していることも確認できる。

AI テキストマイニングによる頻出単語やワードクラウドの分析からは、「子どもたち」が最頻単語で中心的な役割を担っていることが分かる。子どもたちを中心として、参加者の意識が、「作り上げる」「関わる」などの「経験」や、「役に立つ」「感じる」といった「達成感」に繋がっている

することも分かる。ここからは、活動に参加できた経験の重要性や地域に対する思い、仲間の存在や活動を通じた達成感や自信、社会貢献の実感等も読み取ることができる。

表2 総合的な所見における頻出単語

単語	出現回数	単語	出現回数
子どもたち	44	劇	13
経験	25	自信	13
地域	24	貢献	12
仲間	20	笑顔	12
達成感	15	方々	11
参加	15	練習	10
活動	14	先輩	10
		気持ち	10

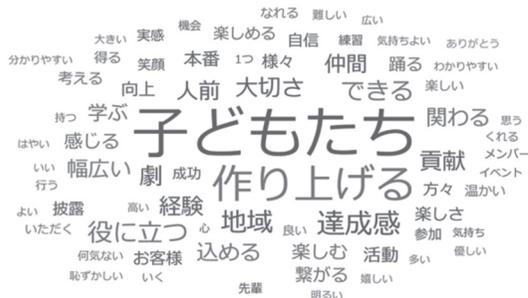


図3 総合的な所見におけるワードクラウド

### 3-2 インタビュー調査

インタビュー調査の項目も質問紙と同様に、第1章に示された7つの問いを元にして作成し、Zoomにてドーナツレモンのメンバーと約1時間フォーカス・グループ・インタビュー形式にて行った。以下、インタビューから得た回答を集約、整理したものを分析する。

#### (1) -1 専門職としての資質・能力について

アートフェスタを通してメンバー全員で同じことを目指し、一つのことに向かって一生懸命になれたことから、この活動が一人一人の学生にとってプラスの要因として寄与したことが推測された。また、保育・教育職においては、子どもの為に保護者に向けて提供することから、アートフェスタを目指して活動していく過程の中で一人ひと

りが楽しく取り組んだことや誰かの為に頑張ること、幅広い年齢の人を楽しんでもらう為の内容を考えることやメンバーでの話し合い、対象に合わせての方法や伝え方等、目標に向かって多くの積み重ねをしてきたことが、現場の仕事との共通点として捉えられていることが分かった。さらに、地域との関わりがあったことで地域の大切さを学べたことや、アートフェスタでの経験が専門性や学習意欲の向上に繋がっているという実感を抱いていることが分かった。

#### (1) -2 この活動が役にたったと実感した経験について

メンバー全員が「この仲間との出会い」という言葉を何度も繰り返した。活動がなければ知り合わなかった・友達になるきっかけすらなかった者同士が活動を共にすることで、今でも大切な仲間として関わられていることが分かった。また、保育・教育現場における専門性の一つとして、この活動が「人前で歌を歌うことや子どもと一緒にピアノを弾きながら歌うこと等に繋がる」経験だったということが分かった。アートフェスタをきっかけに「人前で何かをすることに抵抗がなくなった」「舞台度胸がついた」「自分自身が楽しもうとすることで聞いている人たちも楽しませることができる」「苦手と感じていたことも活動を通して、新たな自分を生み出すきっかけになった」等、今の仕事にも繋がっていると実感していることが分かった。

#### (2) 活動を通して得たことや達成感・自己肯定感や自信への繋がりについて

「新しい自分を発見できた」「苦手であることもやってみることで面白さや一歩前に踏み出すことができる」等、活動を通して得られた力は自信に繋がっていることがうかがえた。また、「常に誰かに認められないことの怖さを感じていた自分が、そういうことをあまり気にしなくなった」「一歩踏み出すことの勇気や新しいことにチャレンジする世界への楽しみを感じられるようになった」等が述べられた。これらは、「アートフェスタを通して、様々な人に出会い関わりを持た」機会

があったことや「一人ひとりが気持ちを込めて一つひとつに真摯に取り組んだ」こと、「会場等で人から激励や感謝の言葉を受けた」こと等から得られた自信や自己肯定感の向上のあらわれであると捉えられる。さらに、「メンバー同士で、色々な意見を主張しながら話し合いを重ね、尊重し合いながら一つのを創り上げていくことでそれぞれの自己肯定感が高められた」等、活動経験を仲間と共に経ていく過程の中で達成感を得られていることも分かった。一方で、「市役所や地域の方との触れ合いや関わりの中でコミュニケーションを重ねたこと」は、現在の仕事上におけるコミュニケーション能力にも繋がっていることが分かった。また、「手話については苦手意識もあり、手話の経験がなければ、聴覚障害の人に何かを聞かれても困惑していた。でも、アートフェスタの経験から、スムーズに対応することができ相手からも感謝され嬉しかった」ことや「手話経験を小学校現場に取り入れた」等のエピソードもあり、アートフェスタでの経験が、地域に暮らす障がい者への対応や教育現場での活用等にも繋がっていったことがうかがえた。

### (3) 地域社会への貢献について

「大きな活動の一部として活動できた」「初回から手話歌のテーマソングに関われた」「自分たちが歌った音源が色々な所で流れていることの誇り」「アートフェスタを盛り上げる為に様々な仕事を手伝った」等の地域社会への貢献に肯定的な意識を持っている様子がみられた。また「この活動は学生による町おこしみたいなイメージ」と例えるコメントもあり、ふじみ野市を盛り上げていく町おこしを地域の人たちと共に作っていくことの意義を感じていることが分かった。さらに「イベントに興味を持つこと」「自分たちの取り組み等から話題となり、そのことがきっかけで話が始まり笑顔が生まれる」等、こうした空間から交流が生まれたり、人との繋がりが広がったりしている様子が読み取れた。学生たちが活動を通して地域社会と関わることで、自らが貢献している実感や自負へと繋がっていると考えられる。

### (4) 総合的な所見・アートフェスタの経験から得るものについて

「仲間」や「創造力」というキーワードが多くみられた。「この活動が自身の経験値となったこと」「社会へ出る前の学生時代にこのような活動を行っておくことの重要性」「社会人となりさらにその経験の意味が大きかったことに気づいた」等から、自分の成長にとっての活動の意義深さを感じていることが推察できる。さらに「地域に出ることで社会人としての振る舞いや話術を学んだ」「色々な人とのコミュニケーション能力」「本気で取り組むことで得られる達成感」「真剣に取り組むことの大切さ」「共に重ねてきた仲間の大切さ」「楽しいと感じられる嬉しさ」「活動から得られた協調性の大切さ」「色々な人がいることの多様性」等は、保育・教育現場においても必要なことである。そして「相手を尊重して関わることや話すことの大切さ」「こうした活動から自分の世界が広がることを得た」「色々なことを教えてくれたアートフェスタ」等の意見からは、社会人となってから再度アートフェスタを振り返ったことで、この活動の大切さに改めて気が付いたことがうかがえた。

## 第3章 2020年度A大学の取り組みとその成果

### 1. 取り組みの内容

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020年4月の緊急事態宣言の発令を受け社会・経済活動が制限されるとともに、大学では感染拡大防止の観点から並びに被験者・験者の安全を第一とし研究活動の延期・中止・縮小が余儀なくされた。都内私立A大学でも新年度を迎え、すべての授業が遠隔授業を中心に実施する旨の授業実施の方向性が示された。9月開始の秋学期においては一部対面授業が認められる科目が配置された。ゼミ活動の場となる3年生科目「専門セミナー」が該当となったことにより、学生同士で話し合いを重ね「アートフェスタふじみ野2020(オンライン)」に参加することとした。企画内容は、創作したダンスを個々で実演し、それらを編集し

より一つのダンスとして融合させるというものであった。完成した作品はインターネット上の動画共有サービス（YouTube）により配信された。

## 2. 方法

### (1) 調査対象及び調査期間

都内私立 A 大学に所属する幼稚園免許取得希望者 3 年生で、ゼミ活動として 2020 年 12 月開催の「アートフェスタふじみ野 2020」に参加し、研究の同意が得られた 8 名を対象とした。調査は 2021 年 7 月から 8 月に実施した。

### (2) 調査内容・分析方法

対象者には 1 対 1 の半構造化インタビューを実施した。要した時間は概ね 30 分であった。インタビューでは、第一章に示された 7 つの問いを参考にしながら、アートプロジェクトへの取り組みを振り返り、対象者にどのような影響があったのかについて聞き取りを実施した。なお、それぞれのインタビュー間のバイアスを減らす為に全てのインタビューを同一者で行った。対象者の同意を得て、インタビューの様子を手記にて記録した。

## 3. 結果

インタビューでの質問項目と回答は下記の通りである。

### (1) アートプロジェクト参加と保育との関連について

「アートフェスタに参加をして、保育者として現場に立った場合にどのような場面で役に立つと思いますか」の質問項目に対して「その理由」を調査した結果、「人前が出る時に緊張しすぎず、自信を持って出ることができる」「子どもたちの前でダンスを踊る場面や、運動会の練習などで踊りを教える場面などで役立つのではない」「体を動かすことは子どもたちにとってもとても大事なことであり、一緒になって楽しく踊ることができる」等の意見があった。また「リズム体操を完璧に踊れるようになったことが、子ども達に自信を持って教えることができる」「撮影時の『今のいいね』などの声掛けや相手を褒め合ったこと」

「一緒に笑顔で楽しく踊ること」等も具体的な場面としてあげられた。

### (2) 制作過程を通じた達成感や自信について

「オンラインと対面のハイブリッドの方法でゼミ生と作品を作り上げた時に、何か達成感を得ることができましたか。また、自分の自信に繋がるような新しい発見はありましたか」の質問項目に対して具体的な場面を調査した結果、「動画上で全員が同じ画面に登場した時に達成感を感じた」「衣装を自分たちで作ったことに達成感を得た」「ほとんどが遠隔での個人練習だった為不安が大きかったが、撮影時に仲間に褒めてもらったことが達成感や自信に繋がった。また対面での練習で協力することの楽しさを強く実感した」「対面時なら直接話してすぐに決まるようなことが、遠隔の為 Zoom やメッセージでのやりとりで時間が余計にかかった。その分決まった時の喜びが大きかった」等の意見があった。編集に関わった学生からの意見としては「完成した作品に対しての好評価や、動画の再生回数が増えたことが達成感につながり、新しい自信となった」があげられた。

### (3) 地域社会への貢献について

「動画が公開をされてから、地域社会に何か貢献ができたと感じましたか」の質問項目に対して貢献度を調査した結果、「再生回数が増えていて、多くの視聴者がいると実感した。同じ大学や他大学の保育学生、保育者の役に立てていると感じた」「個人動画を繋げた作品を作ったことで遠隔という状況でも『人と人とのつながり』を伝えることができたのではない」「自粛生活の中に明るい話題を提供できたのではない」「大学生は『暇だ』『何をしているのか分からない』との声を多く聞く。今回のアートプロジェクトで作成動画を発信したことで、活動実績を世間に伝えることができた」「保育園・幼稚園で子ども向け動画として取り上げられるのではと思う」という意見があげられた。具体的な場面としては「知り合いに視聴したという報告を受けた時」「YouTube で視聴をした時」等があげられた。

#### (4) アートプロジェクト参画の経験から得た学びについて

「参加をした経験から何か得るものがありましたか」の質問項目で、どのような学びを得たのか調査をした結果、「リズム体操の楽しさを改めて感じる事ができた」「ゼミ生全員と一つの作品を作ることで達成感を感じる事ができた」「初めての対面でのゼミ活動で団結力を高める事ができた」「人前に立つことで自信に繋がった」「対面を自粛しなければいけない環境でも、いろいろなことに挑戦できるということを子どもたちに伝えようと思う」「オンラインならでの保育を考える良いきっかけとなった」「対面とオンラインを融合した作品に挑戦したことによって、ハイブリッドの良さを感じた」「環境の変化に応じる大切さを感じた」「完成した時の達成感と周りの評価がやりがいに繋がった。作品を通して様々な作業の大変さを学ぶ事ができた」等があげられた。

#### 4. 考察

##### (1) 保育・教育の専門性（知識とスキル）の向上について

アートプロジェクトの参加と保育・教育の専門性について、「子どもたちと一緒に楽しむ」「子どもたちに教える」というような「一人一人に寄り添う保育」に対する意見が多く上げられた。動画配信であっても、人前で演じることが学生には模擬授業の一つとして捉えていたことが推測される。近年、保育者養成校においては、養成課程の質的な充実を目指す授業科目として模擬授業の実践が行われている。3年生にもなると保育関連の専門科目で模擬授業を多く経験しているはずである。模擬授業の実践は、学生のスキルアップをはかるとともに自分の取り組むべき課題に気付くきっかけとなる役割を担っている（清，2013）。

また作品の企画立案を行ったことに対し「運動会やお遊戯会などの行事にみんなで力を合わせて一つの作品を作り上げること」「季節にあった曲を選ぶこと」「朝の会や自由時間にも活用できる」の意見から、学生は保育計画に対するイメージと重ねて捉えていることがわかる。

##### (2) 達成感や自信の形成について

達成感や自信の形成について、コロナ禍での活動から「遠隔での練習だった為不安が大きかった」「本当に発表できるのか心配だった」など、活動前は作品発表に対する否定的な回答が多く見られた。しかし活動後では参加学生全員から達成感と自信について肯定的な回答が得られた。

###### ① 達成感を得られた要因について

達成感を得られた場面について「完成された動画を観た時」の回答がほとんどであった。舞台等の対面での発表時では演じている自分の姿を確認することはできないが、今回のリモートでは発表前に自分の姿を確認することができる。よってこのような回答が多かったと考えられる。また衣装についての意見としては、動画で参加者全員が揃った衣装を着ていた場面を見て一体感を得て、その衣装を自分自身で作成したことからも達成感を得たようである。

###### ② 自信の形成について

自信の形成に繋がった場面として「個人練習の積み重ね」「自分の姿の確認」「YouTubeでの完成動画の視聴」がほとんどであった。2020年度においてA大学では、原則入構禁止期間であった為、入構許可されたのは撮影時のみであった。自信を持って撮影に臨むには自宅学習での個人練習が必要不可欠であった。よって完成動画において自分の姿を確認できたことは、練習過程を含め自信の形成に繋がったと考えられる。今回は編集作業を担当した学生からの回答として「編集という新しい挑戦は将来に向けての自信になった。またYouTubeでの再生回数が増えていったことにより嬉しさがどんどん増していった」という回答があった。再生回数というのは自身の姿が見られた回数とも言える。このことは承認欲求が満たされたことによる自信とも考えられる。

##### (3) 地域社会への貢献について

完成動画配信前は「作成中は地域への社会貢献を意識できなかった」との回答もあったが、配信を通じてアートプロジェクトのテーマである「つながり」を実感できたようである。地域社会への貢献度について「コロナ禍でも新しいことが出来

ら得られる体験的な学びの機会があり、時々の状況を判断しつつ対応するという教育・保育専門職に求められる学びの機会がある。一方で、オンライン配信でのパフォーマンスにおいては、その場での応答的な学びの体験はないものの、作品の制作過程における協力・協働が一定の学びの機会を生み出している。またネットというより開かれたバーチャル空間の中では、視聴回数の増加によって出演学生の承認欲求が満たされていくことが確認された。しかしオンラインでの表現にはやはり限界もある。「表現」することの意味をどのように捉えるのかによって、表現手法は様々である。それらのメリット・デメリットを踏まえながら今後どのように活用していくかが検討されなければならない。また、本研究の2つの調査は、「表現を考える・作り上げる・演じる」等の活動目的は同じでも、対象者の表現手法は異なっている。それでも、両者の回答では、共通して「繋がり」、「達成感」、「自信」等の肯定的な回答が得られた。さらに活動を通して「専門職としての資質・能力の向上」や「自己肯定感や自信の形成」に繋がったことも共通点として明らかとなった。

#### (4) アートプロジェクトの持つ教育的意義について

今回実施した創作ダンスの動画制作では、各学生が個人練習により演技を完成させた。ハイブリッドな環境でのゼミ活動の中で、協力し一つの作品を作り上げたことは学生たちの変容的学びに肯定的な影響を及ぼしたことが示唆された。さらにYouTubeをツールとして活用したことも、自己肯定感や自信の形成に繋がった要因と考えられる。

#### おわりに

本研究では、「保育・教育の専門性への向上」や「異質な他者との関わりや協働から生まれる学び」、「アートを通じた想像性や創造性」、「達成感や自己肯定感・自信との繋がり」、「地域社会への貢献」等の視点から、アートプロジェクトへの参画を通じた学生の変容的な学びの可能性について検討した。2つの活動事例の分析結果からは、活動を通じた学生の変容的学びの一端を垣間見ることができ、本活動が教育的に意義あるものとして機能している可能性を明らかにすることができた。

対面による上演というリアルな公共空間には、子どもを中心とした観客との関係性や相互作用か

ら得られる体験的な学びの機会があり、時々の状況を判断しつつ対応するという教育・保育専門職に求められる学びの機会がある。一方で、オンライン配信でのパフォーマンスにおいては、その場での応答的な学びの体験はないものの、作品の制作過程における協力・協働が一定の学びの機会を生み出している。またネットというより開かれたバーチャル空間の中では、視聴回数の増加によって出演学生の承認欲求が満たされていくことが確認された。しかしオンラインでの表現にはやはり限界もある。「表現」することの意味をどのように捉えるのかによって、表現手法は様々である。それらのメリット・デメリットを踏まえながら今後どのように活用していくかが検討されなければならない。また、本研究の2つの調査は、「表現を考える・作り上げる・演じる」等の活動目的は同じでも、対象者の表現手法は異なっている。それでも、両者の回答では、共通して「繋がり」、「達成感」、「自信」等の肯定的な回答が得られた。さらに活動を通して「専門職としての資質・能力の向上」や「自己肯定感や自信の形成」に繋がったことも共通点として明らかとなった。

肯定的な回答の中には、最初は「練習がきつかった」、「地域貢献について考えていなかった」ものの、「結果的に楽しかった・良かった」、「地域貢献について考え始めた」といった記述が見られた。初めは気付かなかったり消極的であったりしても、活動に参画する中で様々な気付きを得て、自己変容していったことがうかがえる。また、社会人として仕事を担う際に「アートフェスタの経験が仕事と直結していることに気付いた」や「自分で悩んだ際には参画した時の経験に立ち返る」等、本活動の経験が卒業後も有効に機能している様子がうかがえた。

一般的に大学の授業というものは、学生と教職員との閉じたコミュニケーション空間において営まれる。アートフェスタのような外部のより広い公共空間での活動は、教室での通常の授業とは異なる経験ができるという点に価値がある。それは、知識を蓄え、教養を身に付けるといった一般的な学びとは異なり、学生により根本的な自己変容を促す可能性を持っていると考える。私たちは、大

学のキャンパスを超えて、地域社会と協働しながら、学生の学びの空間を様々な仕方で広げていくことが必要であり、そうしたチャンスやきっかけを増やしていくことが求められるのではないだろうか。

今後の課題として、学生の変容的学びのプロセスを引き続き調査し、データを蓄積・分析していくことで、より重層的に学生の変容的な学びに繋がるプロセスを構築していく必要がある。そして、学生一人ひとりの学びと成長の為に大学は何ができるのか、さらに検討を重ねていきたい。

#### 参考文献

- 菅家沙由梨・西田希・雪吹誠（2019）, 幼稚園教員養成課程「身体表現」の模擬授業が幼稚園教育要領の理解度に与える影響, 目白大学高等教育研究第25号.
- 木村浩則・文野洋・奈良環（2017）, 産学官連携によるサービスラーニング・プログラムの開発 報告書, 文京学院大学.
- 清葉子（2013）, 模擬授業演習（幼稚園）の立案とその教育効果, 杉山女学園教育学部紀要 Vol6.
- 正木大貴（2018）, 承認欲求についての心理学的考察：現代の若者と SNS との関連から, 京都女子大学大学院現代社会研究科紀要第12号.
- メジロー, ジャック, 金澤陸・三輪建二監訳（2012）, おとなの学びと変容－変容的学習とは何か, 鳳書房.
- 吉岡良介・萩原ひろみ（2021）, 臨時休園中の動画配信による遠隔保育について：山梨大学教育学部附属幼稚園の場合, 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第26号.

<https://textmining.userlocal.jp/> 参照日 2021 年 9 月 10 日

（2021.9.27 受稿, 2021.11.15 受理）

## 資料1：【学生による質問紙調査より】

○2019年度、アートフェスタふじみ野に参加して良かったですか？

○上記の質問に対して、そのように感じた理由を具体的に述べてください。

・自分自身、保育者をめざしている為、子どもの前でなにかを披露するという経験を少しでも多くしたいと感じていた。日頃からダンスをしていてイベントなどに多く出演している為、人前で踊る事は慣れていたが子どもの前で踊る事は慣れていなかった為、子どもがどう楽しんでくれるかできるだけ笑顔で踊ったり歌を口ずさんだり工夫をした。／・地域の人や子供たちが来てくれて笑顔になってくれたから良かった。／・リハーサル等を含め、各々で考えることができ、本番をいい形で終われたから良かった。／・出なければ関わることのなかった先輩と関わることができたりCN全員で出たことでより仲が深まって良かった。／・アートフェスタを通して、先輩方や地域の方々と関わることができて良かった。／・地域の子どもたちと関わるきっかけになったので良かったと感じた。／・準備などがすごく大変でしたが、本番は様々な人が楽しんでくれたので！良かった！／・みんなでひとつのものを作るのが楽しかった。／・コミュニケーション力が上がり、団結力を生み出すことが出来た。／・地域の行事に参加することはあまりないので良い経験になった。／・色々な方々との繋がりを感じられたから良かったです。手話の練習をするために地域の小学生が参加しているコーラスに参加したり、特別支援学級に授業をしに行ったり、その小学校へ実習に行ったり、色々な繋がりが感じられました。／・楽しかった。／・自分たちでストーリーを考えたり、演出を考えたり、子供たちがどうしたら喜ぶかを考えるいいきっかけだった。／・アートフェスタを通して大好きな仲間と心を込めて歌を届けられたことが幸せだった。／・みんなで試行錯誤して作り上げた作品を見て喜んでくれたお客様達がいたから本当に良かった。／・子どもを対象にした物を考え、それぞれが楽しんでもらう為にどうすればいいか試行錯誤して作ったもので、舞台と客席の子どもたちとのコミュニケーション感じられて良かった。／・パズルのピースの一部のようになれたから満足。／・なにより、参加させていただいてとても温かい気持ちになれるから参加して良かったです。／・出演者、お客様、幅広い年代の方々が来場しており、会場を包んでいる雰囲気がとても温かいと思います。／・また出演者として参加させていただくと、「音楽や芸術は人の心に触れ、動かす力がある」と強く実感します。／・自分が音楽や芸術が好きであること、それと共にもっと頑張りたいという気持ちを再認識させてもらいました。／・今でも連絡を取り合いたいと思える、かけがえのない仲間と出会えることができた。

○この活動は、専門職としての資質・能力（保育・教育の専門性・スキル）を向上させるものでしたか？またこの活動は役に立ちましたか？

・子どもの前でなにかを説明することや、自信を持つことに繋がるのではないかと、／・子供達の前で何かをするときに緊張したりして中途半端になったり、出来なかつたりしないように、人前に立ってやる体験をして力をつけることができたと考える。／・子供に対してやるものだったので、子供の目線での自分たちはどのような姿なのか、などを広い視野から見ることができた。／・人前で、沢山の子ども達が見ている中で発表するという機会があまりないので、よい経験となった。セリフはなかったのですが、踊っている中で、真顔で踊るのではなくジャンボリミッキーという明るい曲でもあるし、目的は子ども達が笑顔になってくれること、楽しんでくれることであつたため、笑顔で踊るように心がけた。このことは、実際の現場でも役に立つことだと思う。実際に職についたら、毎度毎度緊張していられないので、人前に立つ経験をたくさんすることや、表情を考えるとところがスキル向上に繋がっていたのではないかと考える。／・劇（声の大きさ、台詞を読む速さ等）やダンス（大きく全身を使ってわかりやすい動き）を行うことを意識することで、子どもたちの目線となり、楽しめる方法を考えることができたと思います。子どもたちの前で何かを発表する、見せるという経験をする事ができた。実習や演習の授業で人が見ている前で堂々と発表できるようになった。／・この活動は、資質・能力を上げるものであると思います。私は、先輩の言われたことをこなすような感じでしたので、仕切るなどをできませんでしたね。でも、手話や音楽で人を笑顔にさせることは学べました。／・子どもが楽しめるよう、話し方や見せ方を工夫することが出来た。演者として笑顔で楽しみながら行ったことで、緊張が解け、観客を楽しませることが出来た。／・積極的になれると思った。／・子どもの事を考えながら演じたりしていた人にとっては、子どもが分かりやすいようにするにはどうしたらいいのかということ学び、児童理解の向上を図れたのではないかと思います。／・保育園や幼稚園ではお遊戯会等があるので、そういうところでも役に立つと思います。／・見ている人がどのように感じるか、何を楽しいと感じるかなど、相手の立場を考える面で役に立ったと思います。／・エンターテイナーとしての素質を磨けた。／・どのように話を展開すれば子どもたちが喜ぶのかをストーリーを考えながら演じたことで、幅広い年齢の子どもが喜ぶストーリー

の展開ができたと思う。／・子どもから大人まで幅広い年齢のお客様楽しんで頂けるには、どんなものをどんな風に届けたいのかなど、仲間と一緒に考えることや、実際に舞台上に立つことは、かけがえのない経験となりました。／・現場では、自分の得意なこと（歌うこと）を活かして対象となる方々（子どもたち）を楽しませることや、仲間（職員同士）と力を合わせることの大切さを改めて感じており、活動が役立っていると思います。／・仲間と協力しあって1つのものを作り上げる力や、想像力・表現力が向上すると思う。それが現場で、子供たちと接する中で絵本の読み聞かせや言葉の伝え方に役立つと思う。／・専門職についていないので、実際にはわからないが、子どもたちの為に考えて行う事が、仕事の責任になると考え、役に立ったと考えられる。／・人前に出ることに慣れる機会になった。また、みんなで作り上げるものの大切さ、チームワークの難しさや面白さに触れることで人間性の向上を図ることができた。／・確実に向上させるものであり、役に立っています。／・まず、聴いてくださる方やメンバーの気持ちに寄り添うためにはどうすべきかを本気で考えるため、人のために働く私たちにとって「誰かのために」という想いは直結すると考えます。／・また、演目を構成する力やグループのマネジメント力は日々の現場での業務に役立っています。

・具体的には、活動の流れを組む時に「演目と同じでしっかり導入で子どもたちを惹き付けよう」という引き出しの1つになったり、現在職場では副責任者をしているのですが「職員1人ひとりが気持ちよく働くために、ドーナツレモンのリーダーとしてメンバーの気持ちに寄り添ってきた経験を活かそう」と意識して働くことができています。／・幅広い年代、多様な考えを持った人たちと関わった経験は、今の職に非常にプラスになっていると考えます。

○この活動を通じて、何を得ましたか？その上で反省点や自分自身の課題はありましたか？

・子どもの前で披露するという事で、自分の自信に繋がった。また、その上で多くの先生方や先輩・後輩と関わったことが私はとても良かった。／・コミュニケーションをとることで、今回とは関係なく就職の事などを聞けたりすることができた。／・人前で何かをするとき、緊張の解き方や、見てる人が楽しむことができるようにすること。／・もっと笑顔でやれば良かった。／・達成感を得た。やはり何ヶ月もかけて創り上げたので、それが終わると同時に達成感が込み上げてきた。反省点としては、喋り方にもっと工夫すればよかった。／・先輩方の優しさ、ひとつのものをみんなで作り上げる楽しさ、難しさという経験や感情を得ることができた。一年生という1番後輩である立場であったため、たくさん先輩方にお世話になりながら、アートフェスタを終えることができた。その時は、言われたことを行い、ついて行くことに必死だったが、3年生となった今、振り返ってみると先輩方の偉大さや優しさに改めて気づき、私も後輩に対してそうでありたいと思う。また、一つの劇を作り上げたということで、練習は大変だったけど、その分楽しいことや、難しさから達成感を感じる事ができた。／・大人で何かを作り上げることで、達成感と同時に、仲間との「団結力」や「助け合う大切さ」を感じる事ができました。もう少し練習を重ねることでさらに良い作品を作り上げることができると思いました。／・人前に立って何かを披露するときに恥ずかしがらずにやり切る力。／・さまざまな経験と、繋がりを得ることができました。／・いろいろな人の熱量が異なっていたことが難しかったかなと思います。／・子どもの前で何かを披露する時の気持ち作りが分かった。緊張してしまう為、披露する回数を増やしていきたい。／・団結力／・前に立って何かをするという経験を積むことができました。／・地域連携の大切さを学びました。色々な行事を行なっている地域に目を向けて、積極的に関わっていくことが大切だと思います。現在、地域理解が不足していると思うので、それを深めていくのが今後の課題だと考えます。／・役になり切る。／・子どもたちと歌って踊ることの楽しさ。(子どもたちがすぐに溶け込めるような)／・仲間の大切さを改めて実感できました。仲間同士お互いの良さを活かしながら協調すること。観に来てくださる方々も一緒に(参加型で)楽しめるような届け方を考え、限られた時間の中で集中して練習を重ねること。そして本番は仲間とアイコンタクトを取りながら心を込めて演奏し、お客様に笑顔になって頂けるように楽しむこと。このような貴重な経験をさせて頂いたおかげで、仲間との絆も深まり、幸せな思い出を得ることができました。／・自分自身の課題は、仲間の素敵なところを真似て、周囲への気配りをもっと意識し、積極的に自分にできることを探していくことです。／・学年の違う人達と、1つの物を作り上げる難しさや楽しさを得ることができました。／反省点としては、全体をまとめる時に、もう少し下の学年の意見も聞くべきだと思ったので、全体を見て進めることが課題だと思います。／・子どもを対象に考えるプロジェクトやプログラムが様々な視点から作成できるということを得られた。反省点としては、時間と子どもたちへの満足度を計算してもっとできたのではないかと考えられる。／・高い専門性と豊かな人間性。／・1人の社会人としての立ち居振る舞いを学びました。／・これは学生の頃から感じていたことですが、関係者の様々な方々とコミュニケーションをとっていく中で何気ない会話から言葉遣いや話し方等、思い返せばそこで多くを学んでいたのだと思います。／・課題や反省点としては、性格上相手に寄り添うと

いう意識が先行しすぎてしまい、肝心の自分の考えが相手に届いていないことがあることです。相手の気持ちをしっかりと受け止めつつ、更に自分の思いもすすんで伝えられるようになっていきたいと思っています。／・同じことに向かい、お互いに意見を尊重して言い合える、大切な仲間を得ました。

○仲間と共にプロジェクトを成功させたことで、何か達成感を得ることができましたか？自己肯定感や自信の形成に繋がりましたか？それを実感したのは、どのような経験からでしょうか？

・仲間となにかを達成することで、私はリーダーとして後輩を引っ張っていたので自分自身しっかりしなくてはという気持ちが高くなった。そのために、よりはやく情報を理解して回すことや先生方と何度もコミュニケーションをとることなどをした。／・成功したことへの達成感。／・ふりを間違えたりせずに成功させることができたこと。  
 ・達成感を得られた。／・1つの劇を作り上げたということでの楽しさや難しさから達成感を感じることができた。／・自分自身が行ったのはほんの一つの場面にしかすぎないが、それが繋がり一つの劇になった時にとても達成感を感じた。劇を作り上げていく中心の人ではなかったのに、自信や自己肯定感が、これをついたかといわれたら、そうではないが、楽しく頑張りができたことでの自信はついたのではないかと感じる。／・何度も練習を重ねてきたため、最後までやり通し成功した時に達成感を得ることができました。一日を通して「最後までやり通す」経験をしたことで、自信へと繋がりました。／・ずっと一緒に活動していたメンバーで一緒にステージを作り上げることができて良かった。大きな活動としてはアートフェスタが最後だったので今となっては良い思い出になっている。／・達成感。一つの思い出となれました。本番でのまとまりや、それまでの準備での過程が良かったです。／・仲間との絆が深まったと感じた。仲間として最後までやり遂げられた達成感があった。／・達成感がとてもあった。／・達成感を感じました。／・舞台を成功させることができたことは自分の自信にも繋がりました。／・無理だと思ったことでも、みんなで力を合わせれば成し遂げられることを学びました。最初から自分たちで考えて成功すると、それは自信につながると思います。／・みんなが笑ってた。嬉しい。／・ストーリーを作るのに時間をかけ、みんなで考えて完成させた分、創意工夫の大切さを感じた。／・毎年出演させて頂き、大好きな仲間と心を込めて音楽を届けられることに達成感を得ることができました。／・前向きで優しい素敵な仲間から様々な刺激を受けながら過ごした時間、実際にお客様の前で演奏できたという貴重な経験が、肯定感や自信の形成に繋がりました。／・達成感を得ることができました。／・達成感や自信につながりました。／・プロジェクトを成功させるまでの過程や本番が成功したので、自信に繋がりました。／・様々な、エンターテイメントがある中で子どもを対象にできた事が自分の中で、一つの目標が達成できたこと。／・創り上げる楽しさを実感した。／・達成感、大いに感じています。／・メンバー1人ひとりが思いを込め最善を尽くせたこと、歌った我々も聴いてくださったお客様も楽しそうであったという事実は、この上なく嬉しかったです。／・肯定感や自信にももちろん直結すると思います。／・多くの方々の前で演目を披露したり、話をさせていただき経験で度胸がつかえました。以前までは人前に立ち話することに苦手意識がありましたが、今ではほとんどあがってしまうことはなく、落ち着き覚悟を持って話せるようになりました。／・動きながら歌うことや、踊り等、今まで自分が苦手としていたことを、周りとの関係性の中で自信を持って取り組めたことは、新しい自分に気づくきっかけになったと思います。

○地域プロジェクトへの参加を通じて、地域社会に何らかの貢献ができたと感じられましたか？それは具体的にどのような貢献ですか？

・現在、コロナウイルスによって外に出ることや何かを見るという傾向が少なくなっているのではないかと。そういった場面でも今回の事を通すことで、現在も持続すれば地域連携に繋がるのではと考える。／・少しでも楽しむことができることをしたことで、笑顔にすることができたと思える。／・ボランティアとしてですが、冬っていう気分を味わえることができたのではないかと思います。／・地域の人達と実際コミュニケーションを取ることで、文京学院大学の雰囲気や、劇を見せることで楽しさを共有することが、地域社会に貢献できたポイントではないかと考える。／・劇を発表している時は、成功するように、間違えないように必死だったが、文京学院の学生がそのように頑張る姿や、それを見て楽しんでくれたら社会貢献に繋がっていると思う。／・劇を見に来て下さった、地域の方々や子どもたちと一緒に楽しむことで、地域社会に貢献していることを実感することができました。子どもたちの笑顔を見られたのでとても嬉しかったです。／・アートフェスタのステージの他に、地域の子どもたちと一緒に遊ぶ機会があった。子どもたちが喜んでくれたので地域に貢献することができたと思った。／・子供たちや、地域の人たちが楽しんでくれる姿が素晴らしいです。また、オンデマンドでも、また動画を流してくれるという経験が、貢献できたと感じました。／・ふじみ野市の子どもたちを楽しませることが出来た。楽しめていたこと

が思い出になるといいと考える。／・地域の人と交流することの大切さ／・地域の子供たちが楽しんでくれる場を作ることができて、貢献できたのではないかと感じました。／・手話うたが毎年継続されていることから、地域社会に関わることができたと感じられました。また、アートフェスタの練習や手伝い、本番を通して出会う方々のことをだんだん知ることができ、地域の一員に少しでもなれたのではないかと感じることもありました。終わったときに、ありがとうと感謝の言葉を言っていたいたときも嬉しかったです。／・参加できたことは本当に良かった。／・地域の人たちと実際に関わることで親しみを感じることができた。／・お客様の笑顔を見て、歌の力で、聴いてくださった方々の心を少しでも癒すことができたと思いたい。／・はい。貢献できました。／・本番当日は、子どもからお年寄りの方まで劇を楽しんでいただけたので、貢献できたと思います。／・地域貢献は、このような機会がないと挙げられる物がないと思ひ、参加でき地域貢献できたと挙げられることが改めて良いと感じた。／・地域の人とのつながりや文京学院大学の名誉として貢献できた。／・地域社会に貢献できていたかは正直なところわかりません。しかし、参加するというところに大きな意味があったのだと思います。／・イベントに参加したことで、ふじみ野市には様々な活動をされている方がいることを知ることができました。そこから、改めてふじみ野市という地域や人々の温もりや、ふじみ野市が大好きであることを再認識できたように思ひます。／・我々もそんな地域の活性の1つに少しでもなれていたら、それは素敵なことだと思います。／・僕たちの活動で、今まで交流もっていなかった人たちが、関わりを持つ様になり、仲良くなって行く姿がとても印象的でした。

○どんなことでも伝えたいことがあれば自由に書いてください。

・個人的に、上の先輩と共にできたのがとても嬉しかった。／・このような活動を行えたことで自分の成長にもつながり、楽しむこともできたため、またやってみたいと思ひます。／・とても楽しかったです。／・放課後に練習したり、集合時間が早かったりと生活面的に大変なことはあったが、その分CNの人達や4年生の先輩方と時間をかけて作り上げることができて楽しかった。手話も初めてやるととても苦戦したが、よい機会となった。／・初めての経験でしたが、とても楽しく活動することができました。／・ありがとうございました。／・色々な人がこれからも楽しめるイベントになればいいと思ひました。／・劇をしたのが、小学生以来で楽しかった。／・楽しかったです！／・問題は、何もありません。／・参加させていただきありがとうございました。当時は忙しかったのもあって大変だと思ひていましたが、今思ひ返すと、とてもいい経験をさせてもらったと思ひます。／・楽しかったのでやっている事しかない。／・アートフェスタふじみ野という素敵なイベントが続いていること、毎年参加させて頂けていることに感謝の気持ちでいっぱいです。アートフェスタを通して出会えた仲間は、私にとってかけがえのない大切な存在です。／・子どもや、その家庭の感想や意見を聞きたい。／・これに比べてコロナはつらい。／・まず、卒業をしてからも連絡本当にありがとうございました。／・何か力になれることがあれば、これからも言っていたら嬉しいです。そして、他の多くの学生がイベントを盛り上げ、かけがえのない経験をする事ができたらとても素敵な事だと思います。／・これからも文京学院大学と共に、アートフェスタふじみ野が発展していくことを切に願っております。／・様々な経験を与えてくれたこのイベント、また機会があればぜひ参加させていただきたいです。

## 資料2【追跡インタビュー調査：ドーナツレモン】

2021.8.26 / 21:00~22:10 &lt; ZOOM にて &gt; 質問者 1名 / 回答者 4名 (男性 2名・女性 2名)

(1) アートプロジェクトに取り組んだことは、保育・教育の専門性（知識とスキル）を深め、高める上で、また専門職への動機づけや学習意欲の向上という点で、どのように役立っただろうか？

・皆で一つのモノを作った経験が良かった。それは、今現場で「子どもたちと一緒に遊びを考えたり、何かを目指してそれに向かって面白さを拾ったりしながら子どもと一緒に一つの遊びに向き合うこと」と共通している。アートフェスタの活動経験が生きている。／・自分たちの仕事は、子どもや保護者に提供する仕事である。聴いてもらう人たちに向けて・メンバー同士が楽しく活動することが大事であり、「誰かの為に」という部分が共通していた。その経験は専門性とか学習意欲の向上にも繋がる。／・ふじみ野市と協力して作りあげていた。幼稚園の現場においても地域のひととの関わりや人との関わりが大事になる。そうした意味で貴重な経験。／・大好きなみんなと大好きな歌が歌えたことがシンプルに楽しかった。聴いてくれる幅広い年代に楽しんでもらえるように、どんな曲が良いか、どんな風に盛り上げたら良いか話し合ったこと。それは、現場でも対象となる子供達に合わせた保育の仕方、伝え方、対象に合わせて考えていくことと似ている。

(2) それを実感したのは、どのような経験からだろうか？

・メンバーは互いに知らない者同士で、気を遣うタイプばかりで遠慮し合っていた。この活動を通してじゃないと会えなかったからこそ、このメンバーに出会えたことは大きい。／・知らない人の前で歌を歌う機会がなかった。幼稚園現場では、良く歌を歌う・ピアノを弾くことからこの経験が舞台度胸として役に立っている。／・この活動がなければ出会えない仲間と密に関わり、一生懸命に練習したことで仲良しになったことがプラスになっている。今もなお皆で会えることが凄いことであると感じている。／・自分たちが楽しむことでお客さんも感動してくれた。見せる側が楽しむことは大事であり、それは子どもたちに対しても同じ。保育者側がまず楽しむことを得た。

(3) 仲間と共にアートプロジェクトを成功させたことで何らかの達成感を得ることができただろうか？ また、自己の肯定感や自信の形成につながっただろうか？

・自己肯定感や自信に繋がっている。活動を通して、新しい自分が見えた部分もある。仲間と出会ったこと共に活動することで自信となった。緊張してしまい、身体が硬くなってしまふ。動きを付けて歌うことも得意ではなかったがごちなくとも良いんだという気付き、また新しいことに挑戦することで、怖いけど一歩踏み出すことができた。認められなかったら、どうみられるのか怖い気持ちが大丈夫へと変わった。気持ちがずっと落ちた時に、今もそれが新しいことをやってみようと思える。／・こんなすごい世界があるのかと、一歩進むことで見えてくる。色々な人に出会えて、繋がってられる仲間の存在が強くいられることに気付いた。仲間の存在は自分自身に影響することで、心を込めて色々なことに向き合っていくことができた。心を込めて活動したことで涙が出たよと言ってもらえて嬉しかったし、この経験や自分自身で大切にしていたことに間違いはなかったことで自己肯定感に繋がった。／・仲間と色々な話し合いを行った。その都度関わりあることで遠慮なく自分の意見をハッキリ主張できる場があることで自己肯定感が生まれた。尊重し合いながら一つのモノを創り上げることの大切さを感じた。／・初回から連続で出させてもらえたことで達成感を得た。社会人になってからは仕事が辛かったが、アートフェスタやドーナツレモンの仲間に出会うことで自分の居場所を感じられた。自信がなくなっていたけど、自分の存在が尊重されて救われた。

(4) それを実感したのは、具体的にどのような経験からだろうか？

・アートフェスタでは、音楽活動以外にも司会等もした。人前で話すことは得意ではなかったが、数をこなしていくうちに成長した自分がいた。リーダーとしても活躍できた。／子どもたちと関わる時に大事にしたいと思っていることがある。子どもは大人へのイメージを真面目な象徴だと感じている。でも「こんな大人もいるんだ」と思われる存在でありたい。何でも全力で本気でやりたい。子どもとの関係性や思いっきりの良さ、度胸がついたことはアートフェスタの経験から得た。／アートフェスタのテーマソングを手話で歌った。手話未経験者で全く分からなかったが、活動の経験から耳の不自由な人とコミュニケーションをとることができた。苦手意識のままだったら相手を戸惑わせてしまうと思うが、手話経験のお陰で相手が何を言いたいのか分かった。／手話歌の経験から、実習先で毎朝ひとつ手話を教えることにした。手話を覚える経験から、子どもたちにきっかけをつくることができた。

(5) 地域プロジェクトへの参加を通じて、地域社会に何らかの貢献ができたと感じられただろうか？

・アートフェスタのテーマソングを通して、ふじみ野市内の人々が歌う色々な場面に立ち会えた。ふじみ野市の大きなベースの中の一部に自分がなれたことに感動した。ソカの外で演奏した時やアートフェスタの最中等、自分たちの音源があちこちで流れていたことに凄さを感じた。貢献できたかも知れない。／他にもアートフェスタのチラシ配布や宣伝等、テーマソングを広めていく活動等も地域貢献だと思う。／学生ができる町おこしというイメージで、大学を通してふじみ野市を盛り上げていくように感じた。ホールやショッピングセンターの舞台も大きなステージでお客さんもたくさんいた。学生ができる町おこしのようで貢献できた。／家族や友達も多く来てくれたが、そういう人だけでなく、地域の人たちもたくさん来てくれた。イベントに興味を持ってもらえることが地域貢献に繋がる。／活性化していくことが大事で、自分たちがテーマソングを歌ったりすることで、それが話題に挙がること、そのきっかけで話始めたり、笑ったり交流が生まれる。そう考えると色々な人を巻き込んだことが凄いいことだと思う。仕事場でも地域や団体と関わっている。活動を通して初めての人同士が自然と関わり、交流が生まれる地域貢献が大事だと改めて思った。繋がっていた。"

(6) その他、アートプロジェクトの経験から得るものがあつたとしたら、それは何だろうか？

・仲間、創造力、経験値／アートフェスタのような活動は、サークルとかとは全く違う。社会の大人との関わりもあるので、手抜きはできないし、ちゃんとやらなきゃいけない。そういう意味で、社会に進むための経験や社会に出るための経験を学生のうちにできたことは良かった。／本気で取り組んだからこそ得られた達成感と楽しさがあった。一丸となって真剣に取り組む、楽しんで得られた経験は貴重。仲間と一緒に創り考え協調していくことの大切さや、自分ばっかりの意見だけでなく、みんなが納得できることの協調性や協働の大切さを学んだ。／歌が好きだと心から実感できた。自分に気づくことができた。／色々な人が関わっている会場では、色々な年代との触れ合いがあり、その立ち振る舞いや一人の大人としてのコミュニケーションの場面等は大きな経験となった。／人と関わることの大切さ、色々な人がいるからこそ多様性性が大事。色々な人と関わりと色々な考え方が見えてくる。そうした経験が大事、多様な人たちと関わったことで考え方も広がった。現在仕事をしていても、相手を尊重しながら話すようにしている。尊敬と尊重は違う。だから色々な世代の人の考え方を取り入れ自分も広がっていくと常に感じている。でもそのことに最初に気づいたのはアートフェスタが始まりだったと思う。／社会人になったからこそ、時間が経ったからこそアートフェスタの経験の価値が見えてきた部分もある。特に仕事の中とかで感じる。／学生の時の経験は大事だと思う。立ち返る場所でもあるからこそ、思いを込めて取り組んだ経験に戻って考えることがある。

## 資料3【追跡インタビュー調査：都内私立A大学3年生】

質問者1名／回答者8名（男性2名・女性6名）

(1) アートフェスタに参加をして、保育者として現場に立った場合にどのような場面で役に立つと思いますか。

・リズム体操やリトミックをする時に、子どもたちと一緒に楽しむような場面や、子ども達に教えるような場面に役に立つと思う。また、人前でリズム体操をすることで、人前が出る時に緊張しすぎず、自信を持って出ることができると思う。／コロナ禍で人と対面して何かをするということが難しい中、少しでも周りにいる人が元気になれるよう考えられると思う。／アートフェスタの経験を生かして、現場に立った際は、保育者として運動会や遊戯会などの行事にみんなで力を合わせて一つの作品を作り上げることで1つに繋がることの大切さについて伝えることができると感じた。／アートフェスタではコロナウイルスにより集団での動きを撮ることが出来ない中でどのような作品を作るかと言う点で私たちはダンスの中で人形がどんだん次の人にパスされて離れていても繋がっていると言うようなメッセージ性のある動画を作った。今の子どもたちはコロナウイルスがある世界しか知らないような子どもたちが多いので協力、団結、と言う点を伝えられる体験になったと思った。／子どもたちの前でダンスを踊る場面や、運動会の練習などで踊りを教える場面などで役立つのではないかと考えた。特に子どもたちとダンスで遊ぶ場合では、笑顔を忘れず身体をいっぱい伸ばすなど振りを大きくして、子どもたちが楽しく踊れるよう保育者として振る舞うべきだと思った。／役立つと思う。自分たちで作品を1から作り今回はリモートという形での仕上がりだったがダンスを覚える事や、第三者から見てどう影響がでるのかなど考え実践することで実際に素敵な映像が出来上がったし、保育の現場でも役立つと思った。／ダンスを披露して感じたことは、何より踊っている本人が笑顔で元氣よく踊ることがとても大切になるなと感じた。笑顔で楽しくダンスをすることで見ている人を楽しくさせる効果があることを感じた。そのため、保育者としても子どもたちと楽しく関わるが必要となると思った。／体を動かすことは子どもたちにとってもとても大事なことで、一緒になって楽しく踊ることができるからいいと思う。少しの自由時間や朝の会などに踊ることで、一日のスタートが楽しくなり、またやりたいなどの声が上がれば曲は沢山あるので季節に合わせて選ぶことができるから楽しいと思った。

(2) (1) の質問に対して、具体的にどのような場面でそのように思いましたか。

・リズム体操を完璧に踊れるようになることで、子ども達に教えることができ、自分も楽しむことができると思ったから。動画を撮って配信をするということで、自分自身が楽しんで踊る必要があったから、人前に立つことで自信に繋がったと思うから。／今後も保育者の立場として日頃やっていたものが難しくなっても柔軟に考えることができると思った。／みんなで作る一つの作品を作り上げていると思えた場面は、撮影をしている際だった。中でも印象に残っているのは、1人ずつ撮影をしている際、「今のいいね」など声をかけることや相手を褒め合っている事も多くとても楽しい雰囲気撮影をすることが出来てより仲も深まったのではないかと感じた。／動画撮影の時期私は骨折をしていて動画内で一緒にダンスをすることができなかつたけれど、監督という立場で撮影側に周り、みんなのために動画を作るためにどうしたらいいか考え、みんなの意見を取り入れながら撮影したことで自分も必要とされているという気持ちを味わうこともでき、撮影側も大切なみんなと繋がっている役割だと感じた。／特にカメラを向けられて踊っている時にそう感じた。しかし、動画を見返して、自分の踊りをしっかり見たとき、もっとこうの方が良かったかな、表情が少し硬かったかなど感じたので、こういう機会がまたあったら、今回の反省点や良かったところを活かしていきたいと思った。／リモートで映像をコマ撮りし、それを繋げて1つの曲に仕上げた。ゼミで一部分の活動としてみんなはどうしたらいい作品ができあがるかを考え実践していくことはとてもいい事だと感じたこと。／実際に実習で子どもたちの前でリズム体操を行った際に、子どもたちと楽しく一緒に踊ることで、始めはなかなか踊っていなかった子どもも、一緒に楽しく踊ることで子どもも楽しく踊ってくれるようになり、笑顔で楽しく踊ることの楽しさを実感することが出来た。／季節にあった曲を選ぶことで、導入や終わり方も合わせやすいと思うし、言葉掛けなどではそれを機に夏であるのなら海に行くなどと実体験が生まれると思うので子どもにとって、今後の楽しみや、過去の楽しかったことを思い出として残れるかと思う。

- (3) 遠隔と対面のハイブリッドの方法でゼミ生と作品を作り上げた時に、何か達成感を得ることができましたか。また、自分の自信に繋がるような新しい発見はありましたか。

・一人ずつ動画を撮って編集で全員が一緒に踊っているようにしたため、編集された動画を見た時にみんなが繋がっているということを感じた時に達成感を感じた。ダンス経験者ということもあって楽しんでリズム体操をしている自分の姿を改めて見ることで自信に繋がった。 / ・ゼミの仲間と何か一つのものを作り上げるのは初めてだったので、団結力が生まれました。またゼミ生と会えない中の練習であったため、計画性を持って練習する力をつけることができた気がする。 / ・今回の、アートフェスタのためにもゼミ生みんなでお揃いの服を自分たちで作りに上げることでより達成感を得ることが出来た。また絵の上手な子がデザインに携わってくれることで自分たちだけの服を作ることが出来たことなど全てにおいて他の学生とは違う経験をする事が出来たのではないと思う。 / ・私は骨折していて動画撮影という立場での参加だったので全員の動画を無事に撮影できた時一番達成感を感じた。また撮影などの作業は今までしたことがなかったのでこんなことができるのだと自信に繋がった。 / ・ゼミ生みんなと作り出すことで、集団でひとつの作品を作り出すという達成感を得ることができた。こういった機会は、大学生になるとかなり減ってきていた上に、集団で何かをすることができなかつたので、とても良い機会だった。踊りを覚えて楽しく踊れたことで、自分の自信にも繋がった。 / ・今回は曲の時間を8人で割り振りし、上手く行かない時もありましたが最後はそれぞれのコマを繋ぎ合わせ素敵な作品ができたので動画編集してくれた仲間にも感謝だし、みんなで頑張った良かったなと思った。 / ・遠隔での練習がほとんどだったため、上手くいくか、練習しても上手くならないなどの不安だった。だが、対面での練習の成果を見せる際に、仲間と協力して練習することの楽しさを実感した。また、作品編集を自らが行ったため、その作品見たみんなの反応やその動画の視聴回数が増えていることで自分達でも一つの動画を作りあげることが出来たという自信がついた。 / ・実際にゼミ生とは本番で合わせる時しか会わずに少し動きの違いなどはあって、難しい所もあったが、一つの作品を作り上げる事の達成感とそれまでの過程でのゼミ生と考えてきた時間、話したことは今後もこのような形になることがあると思うのでいい体験が出来たのではないと思う。

- (4) (3) の質問に対して、具体的にどのような場面でそのように思いましたか。

・動画を撮っている時はあまり完成した物が想像できなかったけど、完成した動画を見てバトンが繋がっているように見えた時に達成感を感じることができた。自分が笑顔で楽しそうに踊っているのを見た時。 / ・前より、ゼミの仲間との会話が弾むことや、自分自身見据えた行動が取れるようになってきたと思う。 / ・ゼミ長として、特に印象に残るほどのことをしていなかったのだが、衣装を作る際や踊りの脚を高くあげる部分では自分にしか出来ないこともあったので、ゼミ生として少しは役に立つことが出来たのではないかと考えた。 / ・普段なら直接話してすぐに決まるようなことに時間をかけて zoom や、メッセージでのやりとりで決めたことで一つ一つのことが決まった時の喜びが大きいこと、ダンスの練習を1人でやって孤独だなと思ったけどみんなで合わせた時に練習してよかったなと思えたこと、骨折をして撮影側に回ったけれど今までやったこともない作業を体験できたことそれが成功したことが達成感や自信に繋がった。 / ・人形を、秒間隔で一人ひとりいつ投げて、受け取れば良いかを計算したり、踊っている人が取りやすいように投げたりする上で、カメラを意識してしっかり踊らなければいけないというところが特に大変だったので、達成感を得ることができた。 / ・最後の最終確認での動画をみて、それでもすごいこんな感じに仕上がったと達成感を得た。実際にYouTubeに出た映像を見た時は感動した。 / ・実際に動画がアップされ日に日に視聴回数が増えていることを知り、動画を通して人を楽しませることが出来ていると感じることが出来た。また、何かを協力して作り出す楽しさを感じる事が出来た。そのことから、やりきることが出来たため、自分に自信が付いた。 / ・今はコロナ禍で実際に会って友達と何かをすることが昔よりはだいぶ少なくなってきた、このようなオンラインでの活動が主になって中で、映像を各自撮って繋げるという作業をさせていただいて、大変なことはあるが、リスクなくできるのでいいと思う。

## (5) 動画が公開をされてから、地域社会に何か貢献ができたと感じましたか。

・自分が思っていたより再生回数が増えていて、色々な方の目に入ることができたと感じた。同じ大学の子や他の大学の保育学生、保育者の役に立てていると感じた。オンライン上でも繋がるということが動画を通して伝えることができたと思う。/・動画を見る人に元気を届けられたと思います。また、このコロナ禍で何もかも諦めたりするのではなく、限られた環境の中で出来る事を探し見る人に勇気などを与えられるのかなと思った。/・このご時世で、特に外にも出られずに楽しみも減っている中、動画を繋げた作品を作ったことで会えない事でもひとつに繋がる事が出来るということを伝えることが出来たのではないかなと思う。またこの動画を見てくれた人が少しでも笑顔になれたらいいかなと思う。/・学校に行けなくてもこんなに素晴らしい作品を作ることができる、合わせる回数が少なくてもいつも対面で作るような作品を作ることができ、コロナウイルスに負けていないということが伝えられていたのではないかなと思う。/・コロナによってできなくなってしまったことが増えているこの社会において、遠隔と対面のハイブリッドの方法で新しいものを作り見ていただけることで、退屈していた人たちが少しでも笑顔にすることができたのかなと感じた。/・こんな大変な世の状況で大学生は、「暇だ」「なにをしているのか分からない」と言われがちですがこう言った風に動画にして世に発信していくことによって学校に行かなくても活動していることを伝えられたと思う。/・自分たちで作出した動画を公開し、コロナで苦しんでいる人々に少しでも自分たちの動画を視聴し、物語の楽しさやダンスの楽しさを感じさせることが出来ていたら、少しでも地域社会に貢献することが出来たと思う。/・特に実感はないが、今後この動画は残っていくと思うので、後輩たちや保育園・幼稚園で取り上げていただけたらと思う。その時に少しでも参考程度になる動画が残せることが出来たらいいかなと思う。

## (6) (5) の質問に対して、具体的にどのような場面でそのように思いましたか。

・久しぶりに自分達で作った動画を YouTube に見に行った時に前より再生回数が増えていると色々な人の目に止まっているということを感じることができた。同じ大学の子に見たよという報告を受けた時にそう思った。/・動画を見た友達が、元気出たよ。笑顔が可愛かった。など言ってもらえ少しでも見た人にエネルギーを与えられていると思ったから。/・完成した動画を見た際に、何度も話し合いをして練習を繰り返し、何回も撮り直した事を思い出し大変だったが参加してよかったなと最終的に思えたことに達成感を得た。またこのような機会があれば是非参加したいと思った。/・正直動画を撮っているときは、地域に貢献する意識というよりは、とにかく素敵なものを作ろうという意識の方が高かったのだが、動画が YouTube に掲載されて見ている時、自分たちの力で地域に貢献することができたのかなと強く感じる事ができた。/・YouTube の視聴回数。/・実際には、地域社会に貢献できていたかは分からないが、YouTube などで元気を貰っている人は多くいると思う。自分自身も動画から楽しさなど感じる事ががあるので。/・今は直接あって教えることより、オンラインや YouTube などの動画を通して勉強することがメインとなってきているので、特に投稿すれば残るので、いつでも見られる気軽なコンテンツとして利用して欲しいと思う。

(7) 参加をした経験から何か得るものがありましたか。

・リズム体操の楽しさを改めて感じる事ができた。ゼミのみんなと何か一つの物を作ることで、達成感を感じることができた。初めてのゼミ活動でゼミのみんなと協力することで団結力が高まる事ができた。人前に立つことで自信に繋がった。 / ・コロナの中、オンライン授業だったということもあり、ゼミが始まってからゼミの人たちに会う機会がなかったため今回のアートフェスタを通して仲を深める事ができた。また一つのをみんなで作り上げるということを通し団結力が生まれた気がする。 / ・今回のアートフェスタに参加することで、保育者として体を動かしみんなで協力して作品を作るという経験をする事が出来た。 / 他の学生であれば経験できなかったことだったため、今回の行事に参加する事が出来てとてもよかった。 / ・遠隔でも楽しく、繋がっているということが感じられる作品作りの期間になって、動画撮影をすることで遠隔の難しさ、楽しさ、を知ることができたと思った。また、はやく対面が普通になる世界がきて遠隔でも色んなことができるということ子どもたちに伝え、今後遠隔ならでの保育を考える良いタイミングになった。 / ・私自身ダンスを覚えてカメラに向かって踊るという経験がほとんどなかったので、アートフェスタを経てダンスに少し興味を持つことができた。また、対面と遠隔を融合した作品を作り出すことができ、こういった方法もあるということが分かった。この作品を参考に、今後の保育の場面などで使っていきたいと感じた。 / ・みんなで1つの作品を作り上げることの大切さ、楽しさ、達成感を味わえて良かったと思える活動だった。 / ・今回アートフェスタに参加し、色々なことを学ぶ事が出来た。一つのもの作りあげることの大変さ、作り上げた達成感などリモートなどで環境の変化に応じた取り組みの大切さなど感じる事が出来た。また、今回参加したことで、自分にも自信が付いた。 / ・完成した時の達成感と周りの評価を頂いてやりがいを感じる事ができ、表と裏の作業の大変さを学ぶ事ができた。